

製造業

村田染工 株式会社

<http://www.kosoen-tennenai.com/>

1919年、綿糸等の糸染を手掛ける個人企業として創業。平成元年に会社の一部門として「藍染工房 壺草苑」を開苑。特色は、板で生地を挟んで柄を作る「板締め」。現在は工房の売上が9割を占める。

►CHALLENGE!
時代の変化に対応した
藍染めへの「原点回帰」

►進出先

アメリカ・ドイツ



■会社概要

- 所在地: 東京都青梅市
- 業種: 藍染め製造業
- 資本金: 1,000万円
- 創業: 1919年 ●従業者数: 8人

スローライフ、エコロジー、健康志向時代が注目するジャパンブルー



Step-1 海外展開に至るまでの状況

繊維製品の輸入が国内生産を越えた 平成元年 藍染工房建設で再起を図る

江戸時代、庶民の着物を染めた藍は、明治時代、英國人科学者によって「ジャパンブルー」と命名された。青梅市は、江戸から明治にかけて最先端ファッショングラードであった「青梅縞」の産地である。

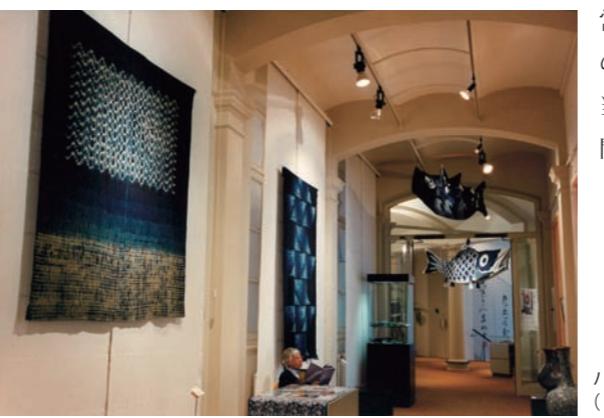
戦後から昭和30年前後まで、青梅は夜具地の全国シェアの約6割を生産していた。しかし40年代になると、繊維業界の不振とともに、青梅の染め物産業も勢いを失う。また、繊維製品の多くが輸入品になってきたため、平成元年、化学染料を使った製造から藍染めに原点回帰。公庫資金を利用し、新しく藍染め専門の工房「壺草苑」をオープンさせた。「当時、先代である父は工房建設に



Step-2 海外展開への進展

ドイツ、カナダの博物館で 注目を集めたジャパンブルー

藍染工房「壺草苑」では、化学薬品を一切使わず、染料のもとである「すくも」を発酵させて色を出す「天然藍灰汁醸酵建て」で藍染めを行う。それがスローライフやエコロジー、オーガニック製品に関心の高い欧米人の目に止まる。



「日本在住のアメリカ人が、日本の藍染めが好きで、藍染めの写真集を発刊した時、その中に当社の工房や製品を載せてくれたんです。それがアメリカ大使館を通じて世界中に発信され、ドイツやカナダの博物館から声がかかりました」。

1998年にはドイツのハンブルグ国立博物館で、99年にはカナダのバンクーバー博物館にて同社のタペストリーなどが展示され、販売も行うことができた。

工房近隣で版画製作を行うカナダ人の力を借りて、英語のホームページも制作する。やがて壺草苑には、世界中から「ジャパンブルー」を求める人が訪れるようになる。



Step-3 海外展開スタート

MoMAを通じて 藍染めストールが世界へ

個人向け輸出として商談が成立はじめたのは、2012年、ニューヨーク近代美術館(MoMA)で、ストールの販売を開始した頃である。気軽に使用できるストールは、外国人にも人気である。

他にも工房を訪れてくれたことがきっかけで、シンガポールでの取引も始まった。

「シンガポールは、現地で洋品店を営む日本人との取引です。当社の海外展開は、大きな

美大出身者など、若き技術者たちが藍染めを継承する



Step-4 今後のビジョン

日本が誇るべき地方産品 「The Wonder 500」認定商品となる

本年度、クールジャパン政策のもとにはじまつた、日本の優れた地方産品を発掘し、海外に伝える経済産業省のプロジェクト「The Wonder 500」がある。同社の藍染めも、500商材の中の1品として認定されたことに、村田社長は期待を寄せる。

「日本のモノづくりが評価され、経済に結びつき始めたと感じるのはここ数年です。自然回帰や健康志向の高まりが、藍染めのような商品を見直すきっかけになったのだと思います」。

壺草苑には、日常的に外国人の姿がある。米ジーンズメーカーのトップデザイナーが訪れ、世界の誰もが知る英国のミュージシャンのステージ衣装を同社が染め上げたこともある。定期的に、アメリカンスクールの小学生も藍染め体験にやってくる。27年前、「本当のジャパンブルーを絶やさない」との強い意志で選んだ藍染め原点回帰への道は、間違っていなかったと確信する日々である。

Interview
我が社の“イスム”



村田 博
村田染工株式会社
代表取締役

時代の変化に柔軟に対応し 自分達ができる範囲で海外展開

繊維業界は、江戸末期からグローバル化の最先端に置かれた業界です。明治中期には、ドイツから化学染料が輸入され、使い方がわからない日本の染工場では、失敗作を量産した時代もありました。

壺草苑の開苑にあたっては、地域や繊維業界の歴史を学び、独自路線の方向性を探りました。そこで打ち出したのが、従来の大量生産ではなく、作る人の心が伝わるような商品展開です。海外から、直接問い合わせをいただくようになった現在、職人の技術や、原料の国内生産地への支援など、日本のモノづくりを将来につなげる意識が必要だと実感しています。